2026 早稲田大学（2/12 実施　文化構想）国語概評

出題分析

試験時間　90 分	**配点**　75 点
大問数　3 題	
分量（昨年比較）〔**減少**　同程度　増加〕	**難易度変化**（昨年比較）〔易化　**同程度**　難化〕

【概評】

〈現代文〉

第一問は例年通り現代の評論（A）と文語文（B）の 2 つの文章からの出題であった。専門的な内容であった昨年と比べて文章は読みやすくなったが、A の文中に漢詩や俳句、短歌が多数引用されており戸惑った受験生もいたと思われる。第二問は入試頻出の著者による論旨の明快な文章であり、読解にそれほど苦労はなかっただろう。本文の分量は第一問、第二問とも昨年と同程度であった。

〈現・古・漢融合問題〉

第三問は例年同様、現代文・古文・漢文の融合問題であった。4 つの文章からの出題であった昨年度と異なり、今年は、甲・乙・丙の 3 つの文章からの出題。例年と比べて理解しやすい内容である上、昨年に比べ本文総量が減少したため、全体的な難易度は易化したといえるだろう。

設問別講評

問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
一	現代文 A　磯田光一『鹿鳴館の系譜』 B　正岡子規『歌よみに与ふる書』	A は明治期の日本の詩における西洋文化の受容について述べた文章、B は正岡子規が和歌に外来の言葉や考え方を取り入れるべきだと述べた文章。故事成語の知識を要する設問が含まれており、昨年出題された生徒の会話を想定した設問は姿を消した。内容説明 4 問、空欄補充 2 問、抜き出し 1 問、複数文章の内容合致 2 問の構成。	標準
二	現代文 藤原辰史「他炊論」	世界規模の巨大商社が食料の流通を独占する現代において、小規模の集団で互いに協力して行われる料理の実践が人びとの繋がりを取り戻す契機になると指摘した文章。文章は読みやすいが、出題意図を把握しにくい設問が散見された。内容説明 3 問、文整序 1 問、脱文挿入 1 問、空欄補充 1 問、漢字問題 1 問の構成。	標準

代々木ゼミナール

設問別講評			
三	現古漢融合 甲　興膳宏『中国名文選』 乙　『孝子伝』郭巨 丙　『二十四孝』郭巨	甲は、漢文訓読法の成立過程と、漢文訓読体が和文脈の中にいかに入りこんだかについて述べた文章。乙・丙は、郭巨が母を養うために息子を犠牲にしようとして天から金の釜を授かった孝行譚。各文章の趣旨を大まかにつかみつつ、設問に応じて細部の読解もこなしていく必要がある。 空欄補充 3 問、返り点 1 問、現代語の語彙 1 問、内容説明 1 問、古文文学史 1 問、古文文法 1 問（「り」の識別）、内容合致 2 問の構成。	やや易

合格のための学習法

〈現代文〉

例年、文語文を含む複数の文章の関係性を読み取らせる問題や古文・漢文との融合問題が出題されており、過去問演習が有効な対策となる。現代文・古文・漢文の同意箇所に注意しながら読み解いていく練習を積むとよいだろう。また、複数の文章の関係性を問う問題は大学入学共通テストなどでも出題されているので、同一傾向の問題に取り組んでみることも有効である。

〈古文〉

まずは基本的な文法・単語の知識を身につける必要がある。その上で、さまざまな時代・ジャンルの文章を読み、文章読解に慣れておくこと。現代文や漢文との融合問題であっても、古文の設問は基本的な知識で解答できる場合が多いので、本番で取りこぼしのないよう、過去問等を活用して十分に対策しておきたい。

〈漢文〉

句法や重要語句の知識をしっかりと身につけることが最も重要である。特に返り点や書き下し文の問題は、基本的な句法の知識が手がかりになる場合が多い。また、過去問に取り組むことで、現代文・古文との融合問題に慣れ、まとまった量の文章をはやく正確に読めるよう十分に演習を積んでおきたい。